

現地理解教育への取り組み

前パナマ日本人学校 教諭

北海道苫小牧市立豊川小学校 教諭 中 屋 里依子

キーワード：現地理解教育，現地校交流

1. はじめに

パナマ共和国（通称パナマ）は北米大陸と南米大陸を結ぶ細長く湾曲した地形で北海道よりやや小さいぐらいの面積である。人口は約330万人（08年）。人種的には黒人系のほか、インディオと白人の混血である人々が主体である。

特色としては「フリーゾーン」があり中南米における物流の拠点であること、パナマ運河があり世界の交通の要所であることがあげられる。

パナマ日本人学校は、昭和47年に設立され、本年度で37年目を迎えた。現在の在籍児童生徒数は、小学部18名（平成24年3月時点）の小規模校である。学校教育目標は「豊かで調和のとれた人間性を持ち、国際感覚を身につけた心身ともに健康な児童生徒を育てる」である。「パナマの国際学校」として認可されているので、スペイン語の授業が必須である。児童生徒は週2時間、現地講師からスペイン語を学んでいる。英会話の授業も全学年週1時間あり、外国語によるコミュニケーション能力の育成に努めている。さらに、「生きたパナマを知ろう」という主題のもと、交流学习を行っている。毎年、私立エピスコパル校及び公立エスタドス・ウニドス校を訪問したり、招待したりして4回交流学习を行っている。また、教員の現地理解ということで、年2回交流している現地校の教員と研修会を設け行っている。

2. 交流の実際

(1) 交流校について

(ESCUELA ESTADOS UNIDOS)

旧市街にある公立校である。公立は政府よりカリキュラムが全て決められている。地域がら学習に集中するというよりは、毎日の生活に大変な家庭が多く生活指導に重点を置かざるをえないようだ。もちろん地域によって生活指導があまり必要のない公立校では、学習に力を入れているところもある。

(COLEGIO EPISCOPAL DE PANAMA)

幼稚園～高校の私立校である。初等部は2つの教育課程があり、スペイン語と英語を教授言語とし、数学は英語の教科書を使用している。また、中学部は「自主自立の精神」を基本的考えとして教育課程で、文部省の定める教育課程の他、独自に設ける数多くの教育内容の中から選択修復できるようになっている。高校2年からは10科目（英語、スペイン語、フランス語を含む）を履修する。100%の大学進学率という進学校である。（30%の外国大学進学を含む）教科の中には日本語も含まれていて、簡単な会話はもちろん日本の歌も歌うことができる。日本語は日本人が指導している。

(2) 交流について

①現地校招待

招待では、両校共1～3年合同交流として「ミニ運動会」を行ったり、学年交流として自分が受け持つ1年生は

「コマ回し・折り紙体験」を行なったりした。現地の子ども達は、日本の昔の遊び道具であるコマ回しを、大変気に入ってくれた様子だった。

交流時はスペイン語が必須である。ただ、日本人学校のスペイン語学習は週に2回のみである。現地職員はいるものの、いつも挨拶程度で余程でない限りスペイン語で会話することはない。パナマに住んでいながらスペイン語に触れる機会が少ないため、交流といっても最初はジェスチャーが中心であった。会話なしでも活動は進んでいたが、ほとんどの児童が「スペイン語で交流したい」と感じていた。自分の知っているスペイン語の単語が相手に通じた時の喜びは、今度のスペイン語学習への意欲につながっていった。

②訪問

エスタドスウニドス校訪問では、授業体験・メリエンダ体験・文化交流をした。文化交流で本校は校歌と和太鼓の発表をした。太鼓の音が胸に響き、高学年の撥さばきに感動していたようだ。

エписコパル校訪問では、日本語を専攻している高校生が日本語での挨拶と日本の歌を歌って迎えてくれた。緊張していた日本人学校の子ども達も、親しみのある歓迎セレモニーに笑顔いっぱいだった。授業体験は、普段の授業に参加という形だった。小学部1年生は図工の授業は、教師も児童も全て英語であった。よって、日本人学校の子ども達への声かけも英語である。日本人学校では週1時間の英語学習があるが、どの子も難しいという抵抗感がありなかなか伸びないのが現状である。

③教員研修

エスタドスウニドス校を訪問し、学校概要の説明を聞いたり、児童による民族舞踊ティピコを観賞したり、意見交換を行ったりした。ティピコを踊った女子児童は民族衣装であるポジェラを着て、ティピコの音楽に合わせて踊っていた。月1回程度あるfolkloristicという民族芸能の時間で学習した内容らしいが、児童の中にはどこかのグループに所属してイベントがある時など踊っているようだ。

エписコパル校教員は、日本人学校で研修を行った。プレゼンテーションで伝統的な日本の祭りを紹介した。パナマのカルナバルとは全く違う音楽、踊りなどに興味を示していた。

両校共に質疑応答の時間を取り、現地の教育事情について具体的に説明をしてもらった。現地の教育事情を調査していく中でなかなか解決できなかったことがこの時間で一揆に解決され、大変有意義な時間を過ごすことができた。児童の交流も必要ではあるが、教員同士がお互いを知ることで児童の交流にも深みが出てくるのではないかと感じた。

3. おわりに

国際理解教育で、心に残った教育活動について記述した。

日本から遠く離れたパナマという国で暮らす児童にとって、「現地を知る」ことは大切なことであり、そのためにはこの現地校交流は大切な学習である。最初は「言葉は通じなくても、心で分かり合える」と感じていた児童が「スペイン語で仲良くなりたい」という希望を持ち、週2度のスペイン語授業に対する意識が変わった時、教育目標達成を感じることができた。児童にとって、現地理解教育で学んだことは大きな財産の一つになるといえるので、この活動が、今後もますます充実していくことを強く願っている。